奇跡のヒーローニシヤマン

神埼　ゆりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奇跡のヒーローニシヤマン

【Ｎコード】
Ｎ２３０３Ｋ

【作者名】
神埼　ゆりあ

【あらすじ】
ちょっと妄想激しめの田舎もんヒーロー（自称）が、本当のヒーローになるまでのお話。

第1話　彼の名前はニシヤマン！

ある田舎町に、奇跡のヒーローニシヤマンがいた。

何が奇跡かと言うと…

田舎すぎて、一度もヒーローっぽいことをしたことがないのだ。

なにせ、ニシヤマンが住む町（と、いうか村）は、人口約１００人余り。すれ違う人みーんな知り合い。（自称）正体不明のニシヤマンの正体は、村中の周知の事実なのであった。

しかも、ニシヤマンは村のこどもたちに思いっきし馬鹿にされていた。なんともまぁなさけないヒーローである。

そんな彼の唯一とも言えるヒーロー自慢は、木の上に登って降りられなくなった猫を助けたことであった。その猫は、ニシヤマンが密かに思いを寄せる村で1番美人の愛子ちゃんの溺愛していたハナコだった。彼は内心若干高いところが怖かったが、愛子ちゃんに感謝して欲しいというヒーローらしからぬ不純すぎる動機でなんとか猫を救出したのであった。

結果、元々ちょっと天然が入っちゃってる愛子ちゃんだけはニシヤマンを真のヒーローだと思い込んでいるのであった。しかも今まであんまりニシヤマンに興味がなかったため、彼の正体を知らない。彼が愛子ちゃんの隣の家に住んでいることを、彼女が知るのはいつのことだか…

普段のニシヤマンは、普通に学校に通っていた。愛子ちゃんと同じ

中学の3年生である。

西山英雄(にしやまひでお)。

ニシヤマンの本名だ。ひでおは、『えいゆう』とも読む。このヒーローになるために付いたような名前を、英雄はいたく気に入っていた。

ってゆーかこの名前から自分をヒーローだと思い込んでニシヤマンになった。

中学3年の今日まで、彼は愛子ちゃん以外からは特に必要にされてないヒーローだった。

それがいきなり…彼は本当の意味で『奇跡の』ヒーローになるのであった。

第2話　ニシヤマン、思い立つ（前書き）

「ねぇ、英雄君はさ、ニシヤマンの正体知ってる？」
「へ？！」

授業中、隣の席の愛子ちゃんからの突然の質問。愛子ちゃんはひそひそ声で尋ねてきたのに、僕はあまりにも突然なその問い掛けに（ってゆーか突然の愛子ちゃんのドアップに）びっくりして声をあげてしまった。

「こらっニシヤマン！授業中に騒ぐんじゃありません！！」
教壇に立って国語を教えていた若菜先生が僕に向かって叫んだ。英雄は思わず椅子から立ち上がる。クラスのみんながドッとわいた。と、いってもこのクラスには村中から集められた小中学生合わせて7人しかいないのだが。

「先生、ごめんなさい！宇宙から救難信号が来てたもんですけぇ…」
また、クラスがドッとわく。愛子ちゃんもクスクスと笑っている。
（なんておしとやかで可愛い笑い方なんやろか…）
英雄は愛子ちゃんをチラ見しながらニヤついた。なんていやらしいヒーロー。

「…もういいわ。席着いて。授業を再開します。」
呆れたように若菜先生が言う。いつもの授業風景。

「英雄君はいつも面白いねぇ。」まだクスクスと笑い続ける愛子ちゃんが、また話し掛けてきた。さっき怒られたばかりだというのになかなか肝が据わってる。さすが田舎育ち。
「クラスの皆も、村の皆も、英雄君のこと、ニシヤマンって呼ぶん

は冗談なんよなぁ。酷いわぁ、皆してからかったりして。うちは絶対、英雄君の味方やからね。」

なんともまぁ天然発言の愛子ちゃん。でも英雄には、この「うちは英雄君の味方やから」という言葉しか聞こえていなかった。

（愛子ちゃん…絶対、僕のこと好きやろ！間違いない！なんかニシヤマンのこと気に入っとるみたいやし僕の正体ばらせばもうメロメロや！！！）

「あんな、愛子ちゃん！僕…」「うっさいわニシヤマン！授業聞かんのやったら出て行きぃ！！」

ついに若菜先生がぶちギレた。僕は廊下に放り出されるというなんともベタな仕打ちをうけたのだった。

１２月、田舎の木造校舎の廊下はとても冷えていた…。

「くそー、若菜星人めー。よくもこげん寒い廊下に追い出してくれたな…！愛子ちゃんにも正体ばらせんかったし…」

しばらく、誰もいない廊下で１人ぶつぶつ言うヒーロー。

「……そうや！」

何かを閃き、顔をニヤつかせた。この時点でろくな思いつきでないことは容易に伺える。

「ただ正体ばらすだけじゃあつまらんし、どうせやったらハナコのときよりもっとカッコイイことして、より愛子ちゃんをメロメロにしてからばらそう！」

さすが僕は思いつくことが違うのぅ、とつぶやいたころ、授業終了の鐘がなった。

第2話　ニシヤマン、思い立つ

なんだってこんなものを作ろううと思ったんだろう。昔の人が考えることが全く分からない。

ただ、それが僕の目の前にあるのは確かなことで、僕はそれを触れずにいた。

触るにはなんとも奇怪で、恐ろしく、僕にはとても扱えるものではなかった。

それはある時突然現れた。空から降ってきたのか、地から沸いて出てきたのかは定かではないが、突然現れたのだ。

すくなくとも、僕の知る限りではの話だが。

とりあえず伝えなければならなかった。それが使命だと感じたからだ。僕はそれをそのままに急いで家に帰った。　家に帰ると、家の中にはまだ誰もいなかった。いつもはいるはずの両親もどこかに出かけていた。

居間に置き手紙を見つけた。

『旅に出ます』

またか。うちの両親はなんの前触れもなく、意味の分からないことを思い付き、実行する。

かといって、そんな両親が嫌いではなかった。

僕は置き手紙をそのままに自分の部屋に行った。部屋にあるデジカメをとって、再び家を出た。

さっき、不思議なものをみた公園へ急いだ。あれがこの短時間のうちに誰かの手に入っていたらどうしよう、という不安はあったが、公園に着いたときには、そんな不安も杞憂に変わっていた。

それは同じ場所にあった。青白い光を放ちながら存在した。透明な箱のようなものに入っていた。箱のようなもの、この世界では見たこともない箱であった。算数の教科書にのっていそうな直方体の中にふわふわと浮いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2303k/

奇跡のヒーローニシヤマン

2010年10月15日23時09分発行